

ノボケア Smile

笑顔を支えるインスリン療法

2004
春
No.1

レッツ
フォーカス

インスリン療法の可能性を探る
進化するインスリン製剤

ズームアップ
インスリン

インスリン療法について
正しく理解していますか？



読者のみなさまへ

ようやく暖かくなり、花もほころぶ優しい季節となりました。
読者のみなさまは、新しい季節の到来をどのように迎えていらっしゃいますか。

さて、これまでインスリン治療に関するさまざまな情報を定期的にお届けしてまいりました“ノボケアFriends”が、この春より新たに“ノボケアSmile”として生まれかわる運びとなりました。

“ノボケアFriends”は、大森安恵先生（現：東日本循環器病院・糖尿病センター長／東京女子医科大学名誉教授）の監修のもと、みなさまのインスリン療法をはじめとする糖尿病治療及び日常生活管理の一助となるよう1994年に創刊されました。その後、2003年までの10年間に計35号総部数約300万部を発行してまいりました。

しかし、近年になり糖尿病治療に関する研究や開発が急速に進み、糖尿病治療を取りまく環境は日々変化しています。このようななかで、21世紀を迎え、糖尿病治療はさらなる進展が期待されています。

“ノボケアSmile”は、みなさまの充実した人生のために、また、糖尿病治療に前向きに取り組んでいただくためにも、刻々と進歩する糖尿病治療の情報をすみやかに、そしてわかりやすくお伝えし、よりよい血糖コントロールの達成と維持のお手伝いができればと、新たに誕生しました。

この小さな冊子が、みなさまの糖尿病治療、そして笑顔に満ちた充実した人生への道しるべとならんことを願い、巻頭の挨拶にかえさせていただきます。

2004年 春 吉日
東京女子医科大学糖尿病センター
所長 岩本安彦

裏面から本文が始まります。
このページをめくってお読みください。

監修

岩本安彦
（東京女子医科大学糖尿病センター所長）

編集協力

岩崎直子 内潟安子 北野滋彦 後藤田貴也 佐倉宏
佐藤麻子 佐中真由美 新城孝道 馬場園哲也
（東京女子医科大学糖尿病センター）アイウエオ順

ノボケア
Smile
笑顔を支えるインスリン療法

No.1 Spring 2004

2004年4月発行／第1版第1刷発行 非売品
[発行]
ノボケア友の会事務局(ノボ ノルディスク ファーマ株式会社内)
〒103-8575 東京都中央区日本橋大伝馬町5-7
www.novonordisk.co.jp

[企画・制作]
メディカス株式会社
〒160-0016 東京都新宿区信濃町35番地 信濃町煉瓦館4F



1417320101 (2004年3月作成)

主治医・岩崎先生は「命を預けているBank」のような存在です。

◆ 私が女子医大病院に通うようになりしたのは、結婚を機に北海道から都内に居を移すことになった42年前のことでした。それから数えて岩崎先生は8人目の主治医でして、先生に担当していただくようになってから10余年の歳月が経過いたしました。今では私にとって岩崎先生は、一言でいえば「命を預けているBank」のような存在です。私の身体を定期的に診てくださり、時に検査を指示し、その結果の報告と同時にもちろんいろいろなアドバイスをしてくださる。先生にお会いするのが本当に楽しみで、病院は英気を養う絶好の機会になっています。

♥ 主治医として一番大事なことは、患者さんの状態をできるだけよくすることだと思っています。よくできる余地が少しでも残っていれば、そこをちゃんとコントロールできるように手を尽くすことが私の役割です。特に糖尿病の場合は、何を食べたとか精神状態、社会的におかれた状況、家族関係など、その方の微にいり細にいる暮らしぶりすべてがコントロールに関係してきます。それに他の病気と違ってほぼ一生続く病気ですから、全身を定期的に診ていく必要があります。大学病院の医師といえどもホームドクター的なかわりが必要になるんですね。

◆ 私は、先生がそうして医師としての責任と義務を果たそうとされているのだから、患者も先生とのコミュニケーションを大切にしたい。正直に素直に応える責任と義務があると日々思っています。

♥ 向井さんは本当に正直で素直でいらしゃいますよね。いわれたことをご自分なりに続ける。淡々と続ける。いろんなことがあるだろうけれど、とりあえず続けてみる。

◆ ええ、ただ一途に「継続は力なり」でやってきました。親しい仲



医師、患者それぞれに、果たすべき責任と義務があると思っております。

埼玉県川越市 向井孝子さん(67歳)

1936年北海道生まれ。17歳で1型糖尿病を発症しインスリン治療を開始。当時は情報も治療手段も少なく、何度も生きる希望を失いかけたという。しかし一念発起し、栄養士の資格を取得、卒業後は北大に事務職として就職した。そして25歳で結婚し長男を授かる。女子医大病院に就任して初の、糖尿病患者による出産ケースだった。3年後には長女も出産。でも遺伝するとか周囲の偏見が怖くて、子どもには注射を打っている姿を見せませんでした。そんな子育ての一方で、地域ボランティア活動に積極的にかわり、女子医大糖尿病センターの患者会「あけぼの会」の会長職なども歴任。ライフワークは油絵。最近では地元川越市の観光推進事業にも携わるなどアクティブな毎日を送っている。

マイベストパートナーの岩崎直子先生
東京女子医科大学糖尿病センター講師
1982年東京女子医科大学卒業。91年米国シカゴ大学
ハワードヒューズ医学研究所に留学。98年東京女子医
科大学糖尿病センター講師。2003年日本糖尿病学会賞
受賞。日本内科学会内科専門医、日本糖尿病学会指導医。
糖尿病の遺伝素因の解析、分子遺伝学を専門に研究。

患者さんがちゃんと
コントロールできるように
手を尽くすことが私の役割です



間との集まりで食事制限のことなどすっかり忘れて羽目をはずすこともあります。もちろん暴飲暴食はしませんが(笑)。

♥ 人生は杓子定規に過ごせるわけじゃないのですから、臨機応変に自己管理することが一番です。軌道からずれたら修正すればいい。向井さんは、それがご自身の力でできる方です。人生に対してとても前向きでバイタリティもあわせもっています。それが、こんなに元気でいらしゃる秘訣だと思いますよ。

◆ そうやって気がついたら患者歴50年になっていて、昨年、米国ジョスリン賞をいただきました。オリンピックの金メダルのような記念メダルと賞状をいただいて、あらためて生きていることのすばらしさを実感しました。実はこれまで家族と先生以外には糖尿病のことを隠してきました。受賞がきっかけでオープンになって、そのことも大きな節目となりました。すべていろんなことが払拭されて楽になりましたね。先日、二十数回目となる海外旅行ニューカレドニアへと行ってきたのですが、道中、初めてみんなの前でインスリンを打ちました。心の中のしこりが取れて楽でしたね。旅行を心の底から楽しみましたよ。

♥ 向井さんもち前の前向きな姿勢にますます磨きがかかったみたいですね。

◆ ええ。今まで培ってきた事柄を通してもっともっと社会に還元していきたい気持ちでいっぱいです。患者としてはいつも劣等生ですけど、先生これからもよろしく願いいたします。

♥ とりあえず75年の節目を目指してコツコツといきましょうか。

本誌では「マイ ベスト パートナー」に出ただけの患者さんを募集しています。

「糖尿病治療に取り組むあなたと、あなたにとって大切な人とのエピソード」(例:勇気づけられたこと・支えられたこと・うれしかったことなど)を簡単にお書きいただき、住所・氏名・年齢・電話番号をご明記のうえ、封書にてお送りください。応募書類を拝見させていただき、取材のご相談をさせていただく場合に限り、編集部より書面にてご連絡させていただきます。

※応募書類はご返却できません。個人情報に関しましては責任をもって管理いたします。

応募先 〒160-0016 東京都新宿区信濃町35番地 信濃町レングラ3F
メディカス(株)ノボケア編集部内「マイ ベスト パートナー」係 まで